

BCCWJ に見る類義表現「～きる」「～ぬく」「～とおす」の使い分け

栗田 奈美 (立教大学日本語教育センター)

Discriminating the Synonymous Expressions

“-kiru”, “-nuku”, and “-toosu” Based on the BCCWJ

Nami Kurita (Center for Japanese Language Education, Rikkyo University)

要旨

本研究は、BCCWJ を用い、「行為の完遂」を表す統語的複合動詞「～きる」「～ぬく」「～とおす」の使い分けの実態を明らかにすることを目的とする。検証方法としては、3 者の前項に共通して挿入されていた動詞のうち「守る」と「走る」に注目し、それぞれの複合動詞が表す意味の相違を見た。その結果、「守る」の場合、「～きる」は最終段階が重視されるスポーツの文脈で多用され、「～ぬく」は守ることに困難が予想される抽象物（例：権利、信仰）が対象となる用例が多く見られ、「～とおす」はあらかじめ定められている抽象物（例：約束、規則）が対象となり、その状態を変えずに保ち続けることに意味を見出す文脈で多用される傾向が見られた。このことから、「～きる」は瞬時的な最終段階を、「～ぬく」は困難を伴うプロセスを経てそこから離脱するまでを、「～とおす」は一定期間継続するプロセスを、それぞれ焦点化していることが示された。

1. はじめに

本研究では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(以下 BCCWJ) において、「行為の完遂」を表す統語的複合動詞「～きる」「～ぬく」「～とおす」の前項に共通して挿入されていた動詞に注目し、類義表現となっているそれぞれの複合動詞が表す意味にどのような相違があるかを分析する。

この3者のそれぞれ、もしくは3者を比較して意味分析を行った研究は、姫野(1980, 1999)、森田(1989)、石井(1988)、青木(2004)、大友(2005)、中島(2006)、杉村(2008, 2012)、許(2012)等がある。その中でも、後続する研究に多大な影響を与えたと思われる姫野(1980)は、本研究が対象とする統語的複合動詞について、以下のように意味分類している。

1) ～きる

- ・完遂：行為の単なる終了ではなく、行為者の予定通り完全に行われたことを表す。
- ・極度：変化が進み、それ以上はないという究極まで達することを表す。

2) ～ぬく

- ・貫徹：動作を最後まで完全に行うことを表す。
- ・極度：「非常に、とことんまで」という強い程度を表す。

3) ～とおす

- ・一貫継続：継続行為もしくは反復行為として最後までし続けることを表す。

さらに、姫野は「時間性」と「意志性」という観点からそれぞれの比較を行っている。前者については、「～きる」が完遂の瞬間に重点を置いているのに対し、「～ぬく」と「～とおす」は完遂までの過程に重点を置いているとしている。後者の「意志性」については、

最終段階に至るまでに逆流が予定される「～ぬく」が最も強く、「～とおす」がそれに続き、「～きる」は最も弱いと述べている。

本研究は、姫野を始めとする先行研究の知見に考察を加え、「行為の完遂」を表す用法（姫野分類における「完遂」「貫徹」「一貫継続」に相当）のプロトタイプを以下のように整理した。

- 1) ～きる
継続する行為の、瞬時的な最終段階（結果）を焦点化したもの
- 2) ～ぬく
継続する行為のプロセスに、何らかの障害や困難が存在するが、それを克服し、最終段階でその状態から離脱するところまでを焦点化したもの
- 3) ～とおす
状態（結果状態）や行為が、途切れることなく、一定不変に継続するプロセスを焦点化したもの

3者の使い分けは、これらのプロトタイプが持つ意味的特徴を基になされていると考えられる。次節からは、この考察の妥当性を検証するとともに、新たな事実の発掘を求めて行ったコーパス調査について述べる。

2. コーパス調査の概要

2. 1. 目的

「～きる」「～ぬく」「～とおす」の使い分けの実態を明らかにする。特に、1で述べたそれぞれのプロトタイプに関する考察の妥当性を検証する。

2. 2. 資料

BCCWJ 短単位データ 1.0 バージョン、また、コーパス検索用ツールとして「中納言」を使用する。

2. 3. 方法

「～きる」「～ぬく」「～とおす」のそれぞれがコーパス上に現れる件数および使用頻度の高い複合動詞にどのようなものがあるかを検索し、頻度の高いもののうち、3者に共通する前項動詞を選択し、意味分析を行う。

3. 結果と考察

まず、それぞれのデータの個数は「～きる」が 8,378、「～ぬく」が 1,311、「～とおす」が 516 であった。また、3者それぞれにおいて使用頻度の高い複合動詞上位 50 語のうち、3者の前項に共通して挿入されていた動詞は以下の 6 語であった。

表1 「～きる」「～ぬく」「～とおす」共通の前項動詞 6 語のデータ数

前項動詞	「～きる」データ数	「～ぬく」データ数	「～とおす」データ数	合計
為(ス)る	954	17	25	996
遣(ヤ)る	296	59	40	395
守る	65	97	93	255
読む	55	3	34	92
信(ズ)る	76	7	2	85
走る	40	14	8	62
合計	1486	197	202	1885

本研究では、このうち、「守る」と「走る」について分析する。この2語を選び、他の4語を除外する理由であるが、まず、「読む」「信ずる」はデータ数5未満のものを含むため、今回の考察対象からは外した。また、「為る」を外したのは、「～とおす」のデータ数25件中17件が「～とおし」という名詞形で現れていたことに加え、「～きる」においては「極度」¹の意味を表す用例が多かったためである。さらに、「遣る」については「～きる」のデータ数296件のうち、約9割が「やりきれない」という辞書にも一語として記載のある語彙化した形式で現れていたため、これも除外した。以上の理由から、「守る」「走る」の2語について検証することにした。

3者のいずれの前項にも共通して挿入され得るということは、3者間での言い換えが可能であるということでもある。にもかかわらず、その文脈では3者のうちの1つが選択されているという事実に注目し、その1つの後項動詞が選ばれた動機づけを探りつつ、使い分けを明らかにしていく。

3. 1. 前項動詞「守る」の場合

BCCWJにおいて「守りきる」は65件、「守りぬく」は97件、「守りとおす」は93件のデータが見られた。但し、「守りとおす」93件のうち26件は同一ブログ内の用例で、前後文脈50語を確認したところ、まったく同じ内容のものがあつたため、その重複分を除き、79件を考察対象とした。これら3者の意味を比較対照するために、「守る」の対象に注意しながら見ていくことにする。

「守る」の対象は、「人」「場所」「具体物」「抽象物」の4つのカテゴリーに大別した。対象が目的語としてテキスト内に明示されていない場合には、前後文脈から判断して筆者が補った。それぞれの結果は次項からの表の通りである。なお、表の括弧内の数字は用例数を表している。

3. 1. 1. 「守りきる」

「守りきる」の用例で特徴的なのは、表2が示す通り、スポーツに関する文脈で現れるものが半数近くを占めている点である。「守りぬく」の用例ではわずかに2件が見られるのみで、「守りとおす」では1件も見られなかったことを考えると、「守りきる」の用例数は突出している。これらの用例は、野球、サッカー、駅伝、アメリカンフットボール、ソフトボール等、ジャンルを問わず、様々な競技の文脈で見られた。また、対象が得点差である場合は、その大半が僅差であった。スポーツの場合、勝敗が決する最後の瞬間がハイライトとなる。したがって、典型的には、僅差である貴重なリードを試合終了のホイッスルが鳴るまで守り、それが見事に達成された瞬間を切り取って表したい場合に、「守りきる」が選ばれると考えられる。以下にBCCWJの例を挙げる。

- (1) a. 白いボールに覆われたフィールドを駆け、今泉がペナルティゴールで決めたトラの子の3点を守りきった。10-7で逃げ切った早稲田は、その後日本一へと駆け上がる。(松瀬学『早稲田ラグビー再生プロジェクト』)
- b. この大会で、蓮池ホワイトシャークは1点差を守りきったり、みんなが打って大差の勝利を収めたり、さまざまな試合をしながら、準決勝戦では北原に2対0の僅差で勝ち、決勝に進みました。(『土佐広報』2008年08号)

いずれも貴重な得点差を守り、最後には勝利という結果を獲得したことがわかる。(1)a.の用例には、同様に「行為の完遂」を表す「逃げ切る」も使用されている。このような文脈で

¹ 「～とおす」は「極度」を表す用法を持たないため、3者の比較とならない。

は、最終段階を焦点化する「～きる」の効果が有効に働くために、「守りきる」が好まれるものと考えられる。

表2 「守りきる」の対象 (65例の内訳)

「守りきる」の対象		用例
人 (15)		父親 (2) / 殿 / 取材協力者 / 貴方 / 兄 / 自分 / 一人 / 喬子、大久保等の固有名詞 (7)
場所 (13)	スポーツにおける防御エリア (4)	ゴール (3) / ゾーン
	組織 (4)	国 / 一国 / 村 / 家
	城 (3)	城 / 小山城 / 沼田城
	その他 (2)	土地 / 基地
具体物 (5)	貴重品 (3)	相続物 / 村雨丸 ² (2)
	脆弱なもの (2)	胃粘膜 / コンピューター
抽象物 (32)	スポーツにおける得点差 (25)	1点 (7) / 1点差 (5) / リード (3) / ~点 (3) / ~点 (の) リード (2) / 得点 / 決勝点 / 先制点 / 勝ち越し点 / 2 T D ^{タッチダウン}
	定められている約束・ルール等 (3)	約束 / 規則 / ローテーション
	その他 (4)	尊厳 / 命 / 1位 / 信託兼営

3. 1. 2. 「守りぬく」

次に、「守りぬく」の対象と用例を見る (表3参照)。「守りぬく」の対象に関して特徴的な点は2点ある。まず1点は、場所が対象となる用例が多い点である。この場合の場所とは、単なる場所というより、動作主体が帰属する組織、コミュニティ、また、その構成メンバーをも含めたものとして考えた方がいいようである。3者の中で最も多い6例が見られた「城を守る」では、敵の攻撃から城という建造物を物理的に防御するだけでなく、メトニミー的にその城を所有する家や君主、家臣までを守るという文脈で使用されている。「国」が対象の場合も「国家」「祖国」「領国」等、何らかの含意を持つ語彙が使用されており、同様の傾向が伺える。つまり、これらの場所は、動作主体にとって有意味で重要性の高いものであり、場合によっては命を賭しても守るべきものであると言える。

もう1点の特徴は、権利、信仰、伝統等、守ることに困難が予想される抽象物が対象となる用例が多い点である。これらの抽象物には、外から脅かされる可能性があったり、強い意志がない限り、保持することが困難であったりするものが多い。以下に、これら2つの特徴を表す例を挙げる。

(2) a. 晴朝は落城寸前まで追いこまれたが城を守りぬき、結局、両家講和ということになった。(森好夫『松平大和守家の研究』)

b. 極論で言ってしまうと、宗教家とは神の名の下に集められた罪人であり、神とその

² 日本刀の名称。

教えを守り抜かんとする兵士なのだ。罪と血が、常にその傍らにある者なのである。

(渡辺水央『Trigun maximum 深層心理解析書』)

(2)a.の例は、落城寸前まで追い込まれた状況から困難を排して大切な城を守り、最後にはその苦しい状況を脱したことを表している。さらに、その結果が「両家講和」であることから、守った対象が単なる城という建造物ではなく、城を所有する家であったことがわかる。(2)b.の例からは、神とその教えを守ろうとする強い意志が感じられる。また、宗教家を兵士に喩えていることから、教えを貫くことを戦いと捉えていることがわかる。ここでは、ただ受動的に守るのではなく、武器を手にして戦うことで守るという積極的な姿勢が見られる。このように、守るというプロセスに困難が存在し、その困難を克服して守る行為を達成する場合には、「守りぬく」が選ばれるものと考えられる。

表3 「守りぬく」の対象 (97例の内訳)

「守りぬく」の対象		用例
人 (18)		君 (3) / この子 (2) / 殿 / 同志 / 家族 / 家内 / 愛するもの / これぞと思った人 / 主流派 / 相手 / 自分 / 男の身 / 戸田、マリア等の固有名詞(3)
場 所 (25)	城 (6)	城 (2) / 塞 / 小城 / 滝山城 / 鳥越城
	組織 (14)	故郷 (2) / 国家、祖国 / 自分の家と領国 / 町 / 村 / 幕府 / 家庭 / コミュニティ / 社屋と社員 / 豊臣家、小県郡、そごう等の固有名詞 (4)
	その他 (5)	土地 / この地 / 畑 / 西ベルリン / 羽柴勢の背後
具体物 (8)		建造物 / 古代超文明の遺物 / 市庁舎 ³ / 宝 / 畢山の絵 / 資産 / 財産 / 川上犬 ⁴
抽象物 (46)	権利 (5)	権利 (3) / 利権 / 独立と主権
	宗教 (3)	信仰 / 神とその教え / 学会活動 ⁵
	定められている 約束・ルール等 (5)	誓い / 遺志 / 指示 / 順序 / 工程表 ⁶
	その他 (33)	伝統 (4) / (生)命 (2) / 地位 (2) / 大切なもの (2) / 秘密 (2) / 治安 / 憲法 / 独自性 / 信頼関係 / 自由主義 / 自由貿易体制 / 成果 / 部門の誉れ / 農業 / 言葉 / 一生 / 留守 / 平等論 / 家柄のよさ / 信じるもの / 立場 / 沈黙 / 形式 / 試合 / リード / 会社経営の根幹は「人間理解」にあるということ

3. 1. 3. 「守りとおす」

最後に、「守りとおす」の対象と用例を見る (表4参照)。

³ 延焼から市庁舎の建物を守るという文脈であったため、場所ではなく具体物に分類した。

⁴ 小型日本犬の一種。長野県の天然記念物。

⁵ 宗教法人創価学会の活動。

⁶ スケジュールの意。

表4 「守りとおす」の対象 (79例の内訳)

「守りとおす」の対象		用例
人 (9)		愛する人 (2) / 子ども / 好きになった女 / 皆 / そなたたち / 自分 / 胡蝶さん (2)
場所 (3)		地球 / 区劃や広場や通り / 勇猛で粗野な人のいる地
具体物 (10)		コレクション (3) / 現金 / 道具 / レシピ / どんぶり / 村雨丸、新田 ⁷ 等の固有名詞 (3)
抽象物 (57)	定められている約束・ルール等 (11)	約束 (4) / 誓い / 原則 / ルール / 殺生戒 / 日課 / 食べてから寝るまで2時間空けること / 気が進まないことはしないということ
	操 (3)	貞操 / 節操 / 女の操
	その他 (43)	命 (2) / 沈黙 (2) / 秘密 / 信条 / 信義 / 友朋関係と信義 / 平和 / 文化 / 伝統 / 魂 / 真価 / おのれの一分 / 利益 / 社会体制 / 主導権 / 自説 / 大事だと思ったもの / 宮座 / 王座 / 2番目の位置 / 服装 / 涼しい顔 / 別姓 / テンポ / 設定 / 結婚生活 / 長寿食 / バランス / 最後の一線 / ブログに書いてきたこと (12) ⁸

「守りとおす」の用例で特徴的なのは、約束、ルール等、あらかじめ定められている抽象物が対象となる用例が多い点である。これらを守るための積極的、動的な活動は必要とされない。むしろ、その状態を変えずに続けることが必要であると言える。つまり「約束を守る」ことは「約束を破らない」状態を続けることであり、同様に「節操を守る」は「節義を変えない」状態を続けること、「沈黙を守る」は「口をきかない」状態を続けることである。また、「1点差を守る」の場合は試合終了時、「城を守る」の場合は敵を打ち負かし、退散させた時点が「守る」の非明示的な完了時となるが、「約束を守る」の場合はそのような完了時は含意されない。以下に例を挙げる。

- (3) a. 子育てを中心にする、という結婚する時の約束もほぼ守り通しています。(シェリー・アモテンスティーン著・月谷真紀訳『恋人と別れたくないあなたへ』)
- b. それでも私は感謝しています。まず、「セルビア式のやり方でおまえをなぶり殺しにしてやる」とご親切にも予告して下さった高潔なる愛国者の皆さんに、そして沈黙を守り通した同僚や友人、知人の皆さんに。おかげで、あなた方をあてにするのは間違いだということを教わりました。(スラヴェンカ・ドラクリッチ著・三谷恵子訳『バルカン・エクスプレス』)

いずれの例も、守るための動的な活動はなされていない。また、(3)a.は進行形に結合しており、状態の継続性が顕著である。進行形との結合は、結果を焦点化する「～きる」には見られなかった特徴である。一方、(3)b.は祖国を追われた女優の書簡の一部であるが、「沈黙を守り通す」はタ形にはなっているものの、未だ完了はしておらず、その状態が続いている可能性が高い。このように、完了ではなく、その状態を保ち続けることに意味を見出す文脈の場合には、「守りとおす」が好まれるものと考えられる。

⁷ 茶器の名称。

⁸ これらはすべて、前述した同一ブログ内の用例である。表現自体は多少異なるため、12件のデータとして取り扱っているが、内容的には同一の趣旨を繰り返している。

次項では、「守る」同様、3者の前項動詞となっていた「走る」について考察する。

3. 2. 前項動詞「走る」の場合

BCCWJにおいて「走りきる」は40件、「走りぬく」は14件、「走りとおす」は8件のデータが見られた。特に「走りぬく」「走りとおす」についてはデータ数も限られているため、傾向を指摘するにとどめるが、データ数が少ない分、それぞれの文脈も含め、精査することができた。3者を比較対照した結果は以下の表の通りである。

表5 「走りきる」「走りぬく」「走りとおす」の比較対照

		～きる (データ数 40)	～ぬく (データ数 14)	～とおす (データ数 8)
走行の 種類	物理的走行	38	9	8
	抽象的走行	2	5	0
経路	(中間経路/距離)を	11	3	5
	(着点)まで	2	0	1
	(起点)から(着点)まで	0	0	2
共起する 副詞句	最後まで	4	2	0
	全力で	4	0	0
	～なく(例:怪我/休み)	0	0	2
文法形式	名詞形(例:～きり)	0	0	1
	可能表現(例:～きれる/ ～きることができる)	6	0	3
	命令形(例:～きれ)	2	0	0
	意志形(例:～きろう)	0	2	0
	希望表現(例:～きりたい)	2	2	0
	重複構文(走りに走る)	0	1	0
	～てくる	0	2	0
レースの文脈		29	7	3
困難さの含意 ⁹		8	10	2

3. 2. 1. 走行の種類

3者の比較対照に際し、まず、「走る」が物理的走行を表しているのか、あるいは抽象的走行を表しているのかに注目した。抽象的走行というのは、例えば、人生をレースに喩えて「走る」と言うような場合を指す。「走りきる」ではデータ40件中2件、「走りとおす」では8件中0件であったが、「走りぬく」では14件中5件という相対的に多い結果であった。以下に例を挙げる。

- (4) 私たちはこのように多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、一切の重荷とからみつく罪とをかなぐり捨てて、私たちの参加すべき競争を耐え忍んで走りぬこうではないか。(Yahoo! ブログ)

⁹ 複合動詞が現れる文と同一文中に、副詞句(例:耐え忍んで)や節(例:息絶えてもいいから)により、行為の遂行の困難さが示されている場合に、含意があると判断した。

この例は聖書からの引用だそうだが、「耐え忍んで」という副詞句や「走りぬこう」という意志形の使用も特徴的である。この他、「布教のために走りぬく」「魂が走りぬく」等の例が見られたが、いずれも抽象的走行に際し、何らかの困難が予想されるものであった。「走る」をメタファー的に解釈し、比喻表現として使用した場合、最も写像されやすいのが走行中の辛さ、苦しさであるために、困難さの含意を持つ「～ぬく」に抽象的走行を表す用例が多く見られたものと考えられる。

3. 2. 2. 経路

次に、移動経路が明示されているかどうかを観察した。「走りきる」では40件中13件、「走りぬく」では14件中3件であったが、「走りとおす」では8件中8件¹⁰の経路が示されており、突出して多かった。また、「(起点) から (着点) まで」という形式で表されていた用例も「走りとおす」のみに見られた。以下に例を挙げる。

(5) だいたい東京から静岡を過ぎたくらいまでの距離をオートバイで休みなく走り通せば、誰にでもその感覚を味わうことができるはずだ。(素樹文生『旅々オートバイ』)
「～とおす」は結果ではなくプロセスを焦点化するために、経路を明示する傾向が他の2者より強く現れたものと考えられる。

3. 2. 3. 共起する副詞句

複数回現れた共起副詞(句)は数が少なく、「走りきる」と共起していた「全力で」が目立った程度である。移動経路が長くなればなるほど、最初から最後まで全力疾走することは難しい。そのため、「全力で」はプロセスを焦点化する「走りぬく」「走りとおす」ではなく、結果を焦点化する「走りきる」とのみ共起していたものと思われる。「走りきる」には「一気に」との共起例も見られたが、いずれも瞬時性、瞬発性が感じられる副詞である。

また、「～なく」は(5)の例に見られるように、「休みなく」や「怪我や事故もなく」という形で「走りとおす」とのみ共起していた。3.1.3.の「守りとおす」の考察で見たように、「～とおす」は積極的、動的な活動ではなく、状態を変えずに続けることを焦点化する傾向を持つ。同様に「走りとおす」では、休みや怪我のない状態を最後まで続けることに注目しているのではないか。これらの共起例を以下に挙げる。

(6) 主将の■■■■さん(6年)は「目標は全国3位以上。みんなで声を出し合い、最後まで全力で走り切る」と抱負を力強く話しました。(『広報ひゅうが』2008年3号)

(7) 順位やタイムなんかどうでもいいのである。とりあえず、怪我也事故もなく走りとおせるかどうか、初体験者にとっては大問題だ。(Yahoo! ブログ)

3. 2. 4. 文法形式

文法形式では、まず、名詞形は「走り通し」という形でしか現れなかった。同様に、動作というより状態性の能力を表す可能表現は、「走りぬく」では見られなかった。「～ぬく」は3者の中で最も意志性が強いために、無意志動詞となる可能表現とは共起しにくいものと思われる。前項で見た「守りぬく」でも、可能表現との共起が97件中2件(いずれも「～ぬける」という可能動詞ではなく「～ぬくことができる」の形式)で、「走りきる」の65件中27件、「守りとおす」の79件中7件と比べ、かなり少なかった。

命令形、意志形、希望表現については、「走りとおす」との共起は見られなかった。1で見たとおり、姫野では「～きる」が3者の中で最も意志性が弱いとされていたが、実際の

10 「(中間経路/距離)を」と「(起点)から(着点)まで」の両者を含むデータ(例(5)参照)があったため、延べ8件となったが、データ件数は7件であった。

データでは命令形や希望表現と共に起している用例が複数見られ、「～ぬく」ほど強くはないものの、「～とおす」より意志性が弱いとは言えない結果となった。また、強調表現である重複構文（走りに走る）は、意志性の強い「～ぬく」にのみ見られた。

最後に、あちらからこちら、あるいは過去から現在までの移動や変化を表す「～てくる（きた）」は、プロセスと結果を焦点化する「走りぬく」にしか見られなかった。これは、同様にプロセスを焦点化する「走りとおす」にも理論上は見られるものと思われるが、結果だけを焦点化する「走りきる」には多回の場合（例：フルマラソンを何度も走りきってきた）を除き、後接しない形式である。「～ていく」についても、同様の傾向が予想される。以下に本項で取り上げたそれぞれの例を挙げる。

- (8) 逃げ出せるものなら、縛り首にはなりたくありませんでした。そこでカヌーが見つかるまで、おれは走りどおしでした。(マーク・トウェイン『マーク・トウェインコレクション』) (名詞形)
- (9) タイヤメーカー側の基本的な開発姿勢は、あくまで“安全に三百 km を走りきれるタイヤ”である。(柴田久仁夫『AUTO SPORT』2005年6月9日号) (可能表現)
- (10) 「小僧、後でたっぷり可愛がってやるからちゃんとゴールまで走りきれよ。もうふらふらしてんじゃないか」(斎藤純『銀輪の覇者』) (命令形)
- (11) これを最後に、何を失ってもいいから走りぬきたい。足が折れてもいい、ゴールに飛び込んだ時点で息絶えてもいいから、走りぬきたい。そう思いながら、わたしは必死で足を動かしていた。(有森裕子『わたし革命』) (希望表現)
- (12) ことさら かつぜんとして 秋がゆふぐれをひろげるころ たましいは 街を ひたはしりにはしりぬいて 西へ 西へと うちひびいてゆく (八木重吉『八木重吉詩集』) (重複構文)
- (13) 昨夜女鬼谷を出発し、徹夜で馬をとばし、途中から道なき道を走り抜いてきた菊の乱れ髪は、勝ち気そうな美しい顔にぴったりと張り付いていた。(西谷史『ブラディー・セイント女鬼』) (～てくる)

3. 2. 5. レースの文脈

「走る」が用いられる文脈には、レースに関するものが多いことが予想されたが、「走りきる」では40件中29件、「走りぬく」では14件中7件、「走りとおす」では8件中3件と、出現率に差が出た。このことは、「守りきる」のスポーツの文脈における出現が突出して多かったことと並行している。つまり、一般的にレースにおいて最も重要な瞬間はゴールの瞬間であるため、結果を焦点化する「～きる」が選択されているものと考えられる。さらに、同一文中で、結果で最も重要視されるレースの到着順位にまで言及している例は、「走りきる」では5件、「走りぬく」では2件であったが、「走りとおす」には見られなかった。この傾向は、「走りとおす」が用いられている(7)の「順位やタイムなんかどうでもいいのである」という文からも明らかである。このことも「～とおす」が結果ではなく、プロセスを焦点化していることを証明している。以下に、順位にまで言及している「走りきる」の例を挙げる。

- (14) たとえば同じ1位でも、4分3時点まではクォーターごとに300万800円なのに対して、最終クォーターをトップで走り切り、チェッカーフラッグを受けると、つまり優勝すると1599万6200円になる。(城島明彦『F1の経済学』)

3. 2. 6. 困難さの含意

最後に、完遂表現でよく目にする「抵抗を排し、困難を乗り越えて達成する」といった

含意がどの程度見られるかに注目した。これは、予想通り、「走りぬく」が圧倒的に多く、14件中10件であった。また、「走りきる」は40件中8件、「走りとおす」は8件中2件であった。以下に例を挙げる。

(15) エゴロワが迫ってくる。「もうこれ以上走れない」そう思った途端に追いつかれる、抜かれる。「足が折れてもいいから、走りぬこう」こう思った途端、エゴロワを抜く。「だめだ。限界だ」抜かれる。猛烈なデッドヒートがつづく。(有森裕子『わたし革命』)

(16) 島の暮らしのなかで、村八分にあえば、死活問題にもつながりかねなかった。しかし、悔し涙をこらえ、歯を食いしばって、広宣流布に走り抜いてきたのだ。(池田大作『新・人間革命』)

(15)はマラソン、(16)は布教活動と、文脈は全く異なるが、いずれも最後まで走ることに、下線で示したようなかなりの困難が存在し、それに対して動作主体が強い意志を持ち、克服しようとしている、あるいはしてきたことが読み取れる。

4. まとめ

本研究では、「守る」「走る」を前項に持つ複合動詞を例に、類義表現「～きる」「～ぬく」「～とおす」の使い分けを探った。BCCWJを用いたコーパス調査の結果、「～きる」は瞬時的な最終段階を、「～ぬく」は動作主体の意志的、積極的な関与により、困難を伴うプロセスを経て、そこから離脱するまでを、「～とおす」は一定期間変化せずに継続するプロセスを焦点化していることが実際のデータの中に確認でき、それによって3者の使い分けがなされていることが示された。

文 献

- 青木博史 (2004) 「複合動詞「～キル」の展開」『国語国文』73:9, 35-49.
- 姫野昌子 (1980) 「複合動詞「～きる」と「～ぬく」、「～とおす」」『日本語学校論集』7, 23-46.
- (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房.
- 石井正彦 (1988) 「接辞化の一類型—複合動詞後項の補助動詞化—」『方言研究年報』30, 281-296.
- 許臨揚 (2012) 「複合動詞「～切る」の意味と用法—認知言語学の意味関連の観点から—」『日本認知言語学会論文集』12, 285-296.
- 栗田奈美 (2014) 「視覚スキーマを用いた意味拡張動機づけの分析—完遂を表す複合動詞「～きる」「～ぬく」「～とおす」の場合—」青山学院大学大学院国際政治経済学研究科博士論文 (<https://www.agulin.aoyama.ac.jp/opac/repository/1000/16544/16544.pdf>)
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店.
- 中島紀子 (2006) 「複合動詞に関する一考察—「～きる」「～とおす」「～ぬく」の比較から—」『国文学踏査』18, 262-271.
- 大友麻子 (2005) 「アスペクト関数としての *cut* と「切る」」影山太郎 (編) 『レキシコンフォーラム No.1』ひつじ書房. pp.201-230.
- 杉村泰 (2008) 「複合動詞「一切る」の意味について」『言語文化研究叢書7 日本語の魅力』63-79.
- (2012) 「コーパスを利用した複合動詞「V1-通す」の意味分析」『言語文化論集』34:1, 47-59.